

外周帯・四分遺跡の調査

—第127-1次

1 はじめに

本調査は個人住宅建設にともなう事前調査である。調査地は藤原宮の外周帯にあたり、弥生時代の集落である四分遺跡にも該当する。調査区は敷地等の制約から3.7×7 m、約26 m²の長方形とした。ただし住宅造成時の盛土が1 m以上あるので、安全性を鑑みて段堀で掘削し、最終的な遺構検出面積は14.5 m²である。調査期間は平成15年7月2日～7月10日である。

2 検出遺構

基本層序は上から、造成土、水田耕土、床土、黒褐色土(弥生時代)、燈色土・黄色土(地山)の順である。現地表面から1.3 m、敷地に隣接する公道の路面から1.1 m下にあたる、床土直下が弥生時代の遺構面である。調査区内では藤原宮期の整地土を確認できないので、削平されているのであろう。したがって弥生時代の遺構も上部を多少削られている可能性がある。しかし耕作溝以外の破壊はなく、比較的良好な状態で遺存している。

検出した主な遺構は素掘溝3条、土坑5基、小穴および小溝などで、多くが弥生時代に属する。

SD9761は南北方向の素掘溝で、岩盤を削り込んでいるために南側は幅が狭く0.5 m、北では広がって幅2 mとなる。深さは0.6 mほど。調査区南端部でSD9762に接続するとみられるが、耕作溝のためにはっきりしない。埋土は下層が地山の黄色土ブロックを多く含む灰色粘土、上層が暗灰色粘質土で、最上部はマンガンの沈着により黒褐色を呈する。弥生土器片を包含する。

SD9760はSD9761に重複して掘削した溝で、幅0.5 m、深さ0.3 m。埋土は灰色粘質土で弥生土器片を含む。

SK9763は調査区東端にある直径1 mほどの円形の土坑。SK9764は直径2 mほどの大型の土坑。埋土はいずれも灰色粘質土で、弥生土器片が出土した。SK9764はSD9760・SD9761に先行する遺構である。SK9765は調査区西南隅にある土坑。ただし斜行溝の可能性もある。SK9766はSD9761に切られている遺構で、黒褐色土を埋土とする大型の土坑であろう。SK9767は小型の土坑で、埋

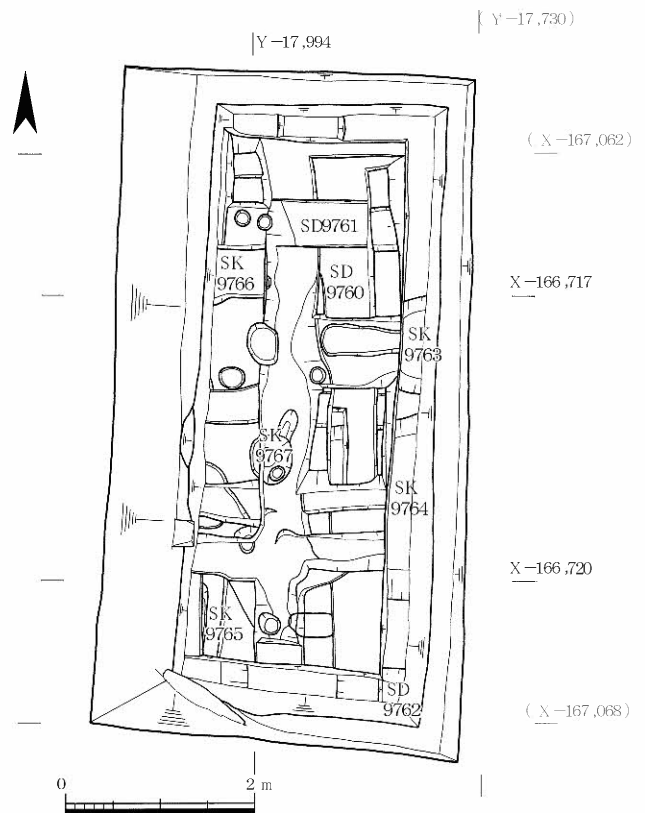


図11 第127-1次調査遺構図 1:80

土は灰色粘質土、上部は黒褐色を呈する。このほか小規模な東西溝、土坑がある。これらの遺構はほぼ確実に弥生時代に属するものだが、詳細な時期や性格については決め手を欠く。

3 出土遺物

整理用コンテナ2箱分の土器が出土した。藤原宮に関連する土器や瓦は出土せず、遺物はいずれも弥生土器の破片である。図示する資料はなく、出土量が少ないため時期判定も難しい。壺、甕などがあり、凹線文・簾状文などを確認できる。

4 まとめ

今回の調査区には藤原宮期の顕著な遺構・遺物が存在せず、外周帯にふさわしい状況を確認したといえる。その一方、弥生時代の遺構が密集した状況で検出された。土坑と溝が複雑に錯綜する状況からは、いくたびかの土木作業がおこなわれたことがわかる。小規模な調査ではあるが、四分遺跡に関する知見を加えることができた。遺構の性格を明らかにするためにも、周辺のさらなる調査がまたれる。

(石橋茂登)